
オー！駄メイド

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オー！駄メイド

【Nコード】

N3076E

【作者名】

zens

【あらすじ】

現代よりも少し先の未来。1人の少年と作られたドジメイドの物語。彼女のドジとは、天然か、それとも作為によるものか。ロボットと少年の日常を描いたコメディ。

突然の話だけど、うちにはメイドが3人いる。

1人目は、銀髪蒼眼の少女。

2人目は、金髪金眼の少女。

3人目は、銅髪黒眼の少女。

でも、このメイドさんたちは、みんな人じゃない。ロボットだ。

俺が子供の時から2人は既にいて、特に、銀髪蒼眼のメイドさんは忙しい両親に代わって俺と双子の姉の奈津美を育ててくれた。

名前は、エリスさん。家事は万端で面倒見もよく、優しい。けれども、叱る時には叱ってくれる人だ。

エリスさんと2人目のミリユカさんは俺や奈津美が生まれる前、親父が高校生に頃から親父と暮らしているのだという。

エリスさんは、その昔、親父が懸賞で当てたらしく、ミリユカさんはいつの間にか住み着いていたのだという。

この2人は、現在世界中で活躍する人型ロボットの先駆けで、旧式とも呼ばれていて希少価値の高いロボットになっている。

彼女たち2人は、新型に負けないくらいの能力だと俺は思っている。

問題は、3人目だ。

3人目の名前はクティーという。一応、最新型のロボットだ。

彼女は、俺と奈津美にプレゼントされた・・・というよりも友達になつてほしいと親父たちから頼まれた所謂欠陥メイドらしいのだ。そこで、親父たちはメイドとして世に出すことを諦め、ロボットでも人と共存できるかどうか試してみようと思った。そして、1週間の試験の結果、俺に懐いた彼女が家に居つくことになつてしまった。

それは俺こと、有栖 達也のドタバタとした日常の再来でもあつた。

まだ、陽も登らぬ早朝。

こんな時間から元気なクティーは、あろうことが、俺の部屋にやつて来て俺を叩き起こしたのだ。

「あつ、おはよう達也君。ところで、今日はどこかに出かけませんか？」

「・・・おい、今何時だと思つてるんだ」

時計を見るとまだ午前4時。

昨日は10時に寝ていたとはいえ、こんな時間に起こされると無性に腹が立つ。

「え、もう朝ですよ。まだ朝ごはんは用意されていませんけど」

少し前までは単なるドジだと思つていた。しかし、こつも常識外れの行動ばかりされると、ドジじゃ済まないような気がする。

「さあさあ、起きてください。今日は天気もいいみたいですから、外に散歩に行きましょう」

「・・・外の雨音が、クティーには聞こえないのか？」

昨日の夜から、雨が降り続いており、今も雨音が聞こえてくる状況で天気がいいと言える辺りは流石としか言えない。

そもそも今日は、天気予報では台風が来るから1日雨と言っていたはずだ。

どこをどう勘違いしたらそうなってしまったのか。俺は理解に苦しむ。

「・・・おかしいですね。今朝の新聞には今日は晴れって」

そう言つて、クティーが目をやった新聞に俺もまた目をやる。

確かに、新聞には今日は晴れとなっている。

けれども、違和感を覚えたのはそこではなかった。

「クティー。日付をよく見てみる」

「えっ・・・って、今日じゃないですか。寝ぼけているんですね」

朝から人を叩き起こしておいて言う言葉じゃないと俺は思う。

それ以前に、俺はまだ眠い・・・。

「・・・よく見てくれ、去年の新聞だよ、それ。ということで、悪いけど、まだ4時だ。もう少し寝かせてくれないか？」

「あっ・・・私ったら、またです。・・・仕方がないですね。では、また後に来ます」

全く反省の様子を見せることのない彼女が部屋から出ていくと俺は、

再び眠りについた。

こんなことは日常茶飯事なのだから、どうってことはない。どうってこと……。

俺はゆっくりと夢の世界へと旅立っていった。

「おはよう、達也君」

「……何故だろう。クティーの笑顔を見ると、そこはかとなく殺意が……」

「ひどいです、達也君。私がこんなに尽くしているのに……」

朝から泣いた振りをするクティーを見るのも日常茶飯事。

それが、嘔泣きだということもまた然りだ。出会った頃に比べて、性格も随分と凶太くなった。

「そもそも尽くしてもらった記憶もないし、クティーにだけは尽くされたくない」

「それって、私がドジだからですかっ!？」

さも自分はドジじゃありませんと言いたげな表情をするクティー。頭のネジが緩んでいるんじゃないかと親父に診てもらったこともあった。

……本当に緩んでいたけど。

それでも、この性格なのだから原因は他にあるのだろう。

親父たちですら原因が分からないと言うのだから、どうしようもない。

しかし、俺以外にこの家で暇人はいない。両親は仕事。姉もモデルの仕事。

うん、仕方なくやっているだけだ。

「そうだ。でも、安心してくれ。俺がクティーが望む一人前のメイドになるための手伝いをする。そういう約束だったはずだ」

心ではそう思っていると言わないのが俺の優しさだと思う。

そう言っと、いつもエリスさんがとても優しい笑顔を浮かべるのが気になるけど・・・。

「そうですよね。私、達也君のために頑張って一人前のメイドになります。では、まずは布団を干します」

こういうひた向きの所は、とてもいいと思う。でも、大抵クティーの気合は空回りするわけで・・・。

こう、まだ俺がベッドに座っているのに、布団に手を掛けて・・・そう、まさに布団を引っ張ろうと・・・。

「よいしょっ!!」

「うわっ!?!・・・いてっ」

俺は、クティーが勢いよく布団を引っ張った反動で後ろの壁に頭をぶつけてしまった。

人とは比べ物にならないほどの力を持っているから、俺が布団に乗っていても蠅が止まっているくらいにしか感じないのだろう。

まさか、錐もみのように回転しながら頭をぶつけるとは思ってもみなかった。

しかし、俺が頭をぶつけた音は予想以上に家じゅうに響いたようで、2階へバタバタと慌ただしい足音が近づいてきた。そして、2回ノック音が聞こえたかと思うと返事も聞かずにドアが勢いよく開かれた。

「何事！？敵襲なの？いえ、敵襲なのですか？・・・って、またですか」

事態を悟った瞬間、3本のアホ毛が萎びていく。リユーさんの3本の毛を見るだけで、みんな、リユーさんの気分が分かってしまう。当然、クティーですら分かる。それくらい分かりやすい人だ。

「ごごご、ごめんなさい。また、やってしまいました・・・」

「私ではなく達也様に謝るべきだと思います。・・・はあ、またお母様に叱られる」

リユーさんの言うお母様とは俺のお袋ではなくエリスさんのこと。エリスさんの得たデータを基にリユーさんのAIは組まれているためにお母様と呼ぶのだ。

一応、リユーさんはお母様こと、エリスさんからクティーの監督を任されている。

と、言ってもエリスさんが忙しい時限定。実質、2人揃って補習を受けているようなものらしい。

ちなみに、リユーさんというのは、ミリュカさんの愛称のことだ。命名者は、意外にも親父。

2人は、仲が悪いように見えるけど、実際にはそうではないとは、親父以外のみんなが言う共通の話。でも、俺は仲のいい2人を見たことがない。

「私も一緒に謝ります。ですから、元気を出してください」

クティーは、そう言つて、ポンと肩に置いた。口調は、エリスさんに似ていなくもないが、行動がとにかく軽い。危機感が全くない。だから、気持ち表に出やすく、また子供っぽいリユーさんは見ていてイライラするのだらう。その証拠にアホ毛が3本とも真っ直ぐに伸びている。

「・・・。ウガーツ。あんたのせいだつ、あ・ん・た・の・つ!!」

「ひっ!? そ、そんな・・・ひどいですよー。私は、ドジでのろまではない子かもしれないですけど・・・あんまりです」

「・・・自覚はしているんですね」

「うわっ。うわあ・・・急に丁寧な言葉遣いなんて気持ち悪いと思います。私のように普段から丁寧な言葉遣いをしていないとおかしく感じますよ?」

2人の言い争いを見ると、ふいに視界をぼんやりとしてくるのを感じた。

言い争いは、ここ数日見慣れているけど、頭が痛くなる。

頭が痛い。そう感じた時、俺は何か今までに感じたことのない解放感を感じた。

そう、何かが抜けていくような、そんな。

・・・何か、頭がぼんやりと・・・。

・・・。

・・・。

俺は、急に酔いが回ってきた人のようにばたりとその場で倒れてしまった。

最後に見たのは、未だに何かを言い争う2人と遠くから聞こえてくる足音だった。

「2人とも何をしているんですか？そろそろ、朝御飯に……。達也様？しっかりしてくださいっ、達也様っ！！」

「……。ここは……。リビングか？」

気がつくと、俺はリビングのソファーに横たわっていた。

そういえば、頭をぶつけて気を失ったんだっけ……。

俺は、気を失う前のことを思い出し、頭を触ってみた。

すると、頭に妙な感触を覚えた。何やら髪の毛や肌とは違う布を触ったような感触がしたのだ。

もしかしくなくても、包帯が巻かれているに違いない。綺麗に巻かれている辺り、エリスさんがしてくれたのだろう。

しかし、案外、冷静に考えられる辺り、軽傷であることは間違いな

いということにも同時に気がついた。

そして、冷静であるが故に現実に戻ることもある。

「・・・そういえば、明日は模試だった。勉強しないとまずいか」

奈津美と違って、俺は普段から勉強なんてしていない。

忙しい合間を縫うようにして勉強もしている奈津美は、学内模試でも常にトップ3に入るほどだ。

俺はというと、授業中は大抵睡眠学習の時間。差がつくのは当然のことだ。

そんな俺に対してもエリスさんや奈津美が、懇切丁寧に教えてくれることもあって赤字だけは何とか免れている。

そうは言っても、ここ最近はず2人とも忙しい身。たまには、俺1人でもやれるという所を見せるべきだ。

「よしっ、やる・・・」

「達也様。まだ起き上がってはダメですよ」

起き上がろうとした俺を制したのは、エリスさんだった。

「達也様、まだ寝ていなくてはダメです。勉強はいつでもできますし、それに私がいつでも教えて差し上げます。ですから、今は休んでいてください」

再び、俺はソファに横にならざるをえなかった。

何故、俺の部屋のベッドではないかという、今は洗濯をして干しているのだという。

そして、今日は天気もよかったので、全ての布団を干しているためにここしかなかったらしい。

「次からは、きちんと布団は残しておくようにしますね」

「・・・俺が怪我するのは、既定路線なのか？」

俺が、啞然としてエリスさんを見ると、彼女はいいえと笑った。

エリスさんは、たまに裏のある笑みを浮かべることがある。今の笑みはまさにそれだ。

こういう時には、出鼻を折っておけばいいが、エリスさんの行動力は素早い。

「・・・折角2人きりなのですからお願いがあります」

「・・・っ」

話を逸らそうとする前に先手を取られ、思わず舌打ちをしてしまった。

普段は、舌打ちなどしようものなら説教ものだ。しかし、今日は勝手が違うようだった。

「たまには、・・・お母さんって呼んでほしいです」

「え・・・えーと・・・？」

予想もしなかった言葉に俺は、思わず視線をエリスさんから外した。恥ずかしくてエリスさんの顔を見ることができない。

確かに、昔はそう呼んでいた。エリスさんは母親代わりというより、母親そのものだったからだ。

俺が、お袋のことをお袋と呼んでいるのは、お袋がほとんど家にいることがなく俺たちにとってみれば母親となっていたエリスさんとの区別の意味も込めている。ちなみに、奈津美は、名前にお母さんをつけて呼んでいる。

たぶん、俺も奈津美も仕事ばかりだった親に対する一種の反発の表れだったのだろうと思う。

その後は、お袋も危機感を覚えたようで俺たちのことを非常に気にかけるようになったけど、呼び名が変わることはなかった。

呼び名を戻したら、また帰ってこないのではないかと子供心に思っていたからだ。

「……達也様？どうかされましたか？」

「ちよっと、お母さんって呼ぶようになった昔のことを思い返してた」

「あつ……。今、お母さんって呼んでくれましたね」

本人に向かって呼んだわけではなかったのだが、それだけでエリスさんは頬に手を当ててきちゃっと言いながら喜びを露わにしていた。

こんなにテンションの高いエリスさんを見るのは久しぶりだった。

それを見ていると、俺は何だか気恥ずかしくなって慌てて話を逸らした。

「と、ところで2人は、どうしたの？」

「私が叱ろうと思ったのですが、奈津美様が……」

そう言っただけでエリスさんは廊下を指差すと困ったように苦笑いを浮かべた。……てか、切り替え早いな。

エリスさんがいつもと同じ冷静な口ぶりに戻ると俺も不思議と落ち着きを取り戻した。

すると、それまでは大して気にも留めていなかった奈津美の怒声が聞こえてきた。

その声を聞いていると、段々と気恥ずかしさというものは失せていき、代わりに壁1枚を隔てた廊下のことが気になってきた。

「……とりあえず、様子をみたいんだけど。何か心配だし……」
「分かりました。では、私も一緒にします。皆さんの面倒を見るのは私の役目ですから」

……表情を見る限りでは、エリスさんも心配になってきたらしい。

俺たちが廊下に出てみると、仁王立ちした奈津美が、廊下にクティーとリユーさんを正座させて、説教をしていた。

ただ、それだけで済めばよかったのだが、リユーさんもクティーも全く反省の態度を示さず、互いに責任を押し付けあっていたために、エリスさんにまで説教をされる羽目になってしまった。

2人から長々と説教をされた後、頭に包帯をした俺を見ると、どうやら2人とも罪悪感が湧いてきたようで、素直に謝ってきた。

とりあえず、子犬のように震えていたのは、きっと罪悪感でいっぱいだったということにしておこう。

俺も、その後ろの2人を見るのは怖いから。

そして、俺たちはリビングに移動して今後の話をするようになった。俺の隣には、エリスさんと奈津美。正面に向かい合うようにしてリユーさんとクティーが座っている。

そこで、まず口火を切ったのは奈津美だった。

「達也のケガが大したことなくて本当によかった。最初に聞いた時は、頭から血を流してるなんて聞いたから焦っちゃった」

「・・・あ、ははは」

奈津美の鋭い視線にクティーは乾いた笑い声をあげる。

そういえば、この家に彼女が居候するようになって、彼女のドジのとばっちりのほとんどは俺が受けている。

コーヒーを溢されたり、彼女が転んだ先に俺がいるなんてことは、まだ序の口。

甘えて抱きついてきた時に、骨を折られそうになったりしたこともある。

当然、姉である奈津美も俺がそういう目に遭っていることはよく知っている。

「でも、リユーさんはともかくとして、クティーってドジとかそういう問題なの？わざと、達也を狙ってんじゃないの？」

「そ、そんなわけないです」

そう言われても、こう何度も俺ばかりがとばっちりを受け続けているば、奈津美の疑念は払拭できることはない。

俺自身、そろそろ勘弁してくれないかと思うことも、しばしばある。それでも、俺が追い出さないのには訳がある。

それは、親父から聞いたある言葉が原因だ。

「達也。・・・クティーは、力加減というものをあまり理解できていない。本当は廃棄処分の予定だったんだが、一応家で預かってそれでもダメなら廃棄せざるを得ないと思っている。エリスに教育の方は任せるが、もしよかったら達也も協力してやってくれ」

要するに、駄メイドのままでは確実に廃棄処分になってしまうとい

うこと。

俺は、幼い頃からロボットが家にいるという特殊な環境に生まれ育ったためか、「廃棄」という言葉には抵抗がある。だから、俺はこの日力強くみんなの前で宣言したのだった。

「俺がクティーを一人前のメイドにしてみせる！」

「達也・・・それ何回目？」

「・・・分からない。でも、今回は違う」

姉の呆れた顔と、エリスさんの笑顔に見守られ、今回こそは俺は1人誓った。

「おはようございます、達也君」

「おはよう、クティー。・・・で、それは何？」

翌朝、廊下でクティーと会った俺は、クティーの手にある光る物が気になって仕方がなかった。

それは、どう見ても・・・。

「え、これですか？包丁だよ、包丁。もしかして、知らないの？」

「こっちに刃先を向けるなっ！！・・・いや、そうじゃない。そもそも持ってくるなっ！！」

クティーは何で包丁を持ち歩いているんだ・・・。何をしていたのかは、エプロンをして律儀にも三角巾までしているので容易に分かる。

とても楽しそうな顔をしているのに、どうしても刃物を持っているのでアンバランスに見える。

それ以前に、人に刃物を向けて話をするなんて……。

これは、注意しないといつかまずいことになる。そう思った時だった。

「クティーさん、そろそろ準備しないと間に合いませんよ」

「あつ、はい。すぐに戻ります。……くるくるー」

リビングから顔を出したエリスさんに呼ばれ、クティーは戻ろうとくるりと回った。

しかし、その調子に乗った行動がいけなかった。

「あつ!？」

素っ頓狂な声をあげたクティーが包丁を俺に向けてこちらに倒れ掛かってきた。

俺は、避ける間もなく目を瞑るしかできなかった。

間髪入れず、ドスツと鈍い音が聞こえ、恐る恐る首だけを俺は動かした。

そこには、刃の部分が壁にすっかり埋まってしまっている包丁の姿があった。

「……」

「……あ、あはは。だ、大丈夫？ 達也君」

俺は、声を出すこともできずただ首を横に振ることしかできない。クティーに押し倒されたような体勢で、互いに見詰め合っている状

況だが、全く嬉し恥ずかしとか、役得といった感情などない。

しばらくの間、俺とクティーはそのままの体勢で完全に固まっていた。

そして、呼んだはずのクティーが戻ってこないの、エリスさんが再び廊下に顔を出すまで俺とクティーはそのままだった。

「クティーさん、どうかし・・・ああっ！？達也様、お怪我はありませんか？・・・ク、クティーさん・・・ちよっとお話があります」

エリスさんの声が聞こえ、俺はようやく何かほっとした気分になり体が動く様になった。

クティーは、彼女の声が聞こえた瞬間に素早く俺の上から退いていた。そして、棒立ちのままエリスさんの怒りを必死に押し殺した声を聞いていた。

「あ、あうっ・・・」

クティーの返事を聞くこともなくリビングへと戻った辺り、相当怒っているのだろう。

肩を落としてとぼとぼ歩いて行くクティーを見ながら、同情すら湧かない辺りに俺も恐怖の中にも怒りが混ざっていることが実感できた。

・・・前途多難って話じゃないな、これはもう。

クティーはエリスさんにみっちり叱られ、今は台所で味噌汁を装っている。

一方の俺はというと、リビングでエリスさんと話をしていた。

「本当に申し訳ありません。私が、包丁を持たせながら不注意だったばかりに達也様を命の危険に晒してしまいました」

「大丈夫、エリスさん。俺、生きてるよ」

・・・色々とあったけどね。こう言いたかったけど、エリスさんがあまりに頭を下げるものだから俺は言うことでできなかった。

「いえ、私はこれではメイド失格です……。お願いします、もう1度だけ名誉挽回の機会を与えてください」

「いや……。だからエリスさんは悪くないって」

エリスさんは、根が真面目な上に内心に溜めこむタイプだから、こう言うておかないと色々と抱え込んで暴走する。

親父曰く、俺にエリスさんがついているのは俺が奈津美に比べて話を聞いてあげられるかららしい。

そんなことはないと思うんだけど……。たまに暴走するし……。

何でも、昔はこんなことはなかったらしいが、慣れてきたら本性が少しずつ出てきたとは、これまた親父の話だ。

とりあえずエリスさんが暴走しないように責任を曖昧にする形で決着をつけた時、ちょうどクティーが台所から出てくるのが見えた。

「達也君、さっきはごめ……。きやつ」

短い悲鳴が聞こえたと思った時にはもう遅かった。

「ぶっ!？」

何か熱いお湯から味噌の香りがするなというところで、味噌汁をぶつ掛けられたと気付くのにそう時間はかからなかった。

しかし、俺は、突然の事に事実だけを掴むのに精一杯で何をすればいいのかまで頭が回らなかった。

「た、達也様！？すぐにタオルと着替えをお持ちします」

「うつつ、またやってしまいました・・・ちゃんと説明を受けたのに・・・」

クティーは涙は出ないものの人間であるならば泣いているであろう状態だった。すっかりしょげかえって顔を上げることさえしない。

・・・泣きたいのはこつちだ。

そうこうしていると、玄関のドアの開く音が聞こえ、続いて廊下を歩く足音が聞こえ、そしてそれが段々と近づいてくるのが分かった。

「何？朝から騒々し・・・」

「奈津美様。どうかされ・・・。クティー・・・またなの？何故かお母様が怒っているのは分かってたけど、これはちょっと・・・」

朝のランニングから奈津美とリユーさんはまたかとすっかり呆れている。

頭に味噌汁のお椀を乗つけた俺と倒れたまま動かないクティー。

しかし、いつまでも味噌汁を被った服のままでいるわけにもいかない。

先にクティーにも着替えるように一声かけると俺は廊下にいるリユーさんにも声をかけた。

「ちょっとシャワー浴びてくるって、エリスさんに伝えておいて。あ、そうそう服は自分で持って行くから」

「ああ、はい。とんだ災難だったね。・・・でも、お風呂場に行けばお母様に会うと思いますけど」

言われてみればそうだなと納得しつつ、リユーさんの隣を通り抜け服を取りに2階へ上がったとした時だった。

突然、エリスさんの酔っぱらったような声が背後から聞こえてきた。

「・・・うきゅー・・・みゅー」

・・・げっ、エリスさんが暴走してる。その証拠に、様子がいつもと違ってている。

ただ、あからさまに様子が違うので気がついたのは俺だけではなかった。

「エリスさん、だ、大丈夫ですか!？」

「お母様、しっかりしてください」

2人してエリスさんに駆け寄っていくのはいい。

けれども、2人とも周りが見えていないようで・・・。

「きゃあっ!？」

「うわっ!？」

同時にエリスさんの所へ駆け寄ろうとして頭をぶつけて倒れてしまっていた。

その上、打ち所が悪かったのか2人とも目を回してぴくりとも動かない。

人の頭も固いわけだが、ロボットの頭はもっと固い。

人が頭をぶつけると、脳震盪を起こすという。

ロボットだと、何というのだろうか……。親父は脳震盪でいいんじゃないかと言っていたが……。ロボットはAIだし……。

……AIストップ、略してAISとかか？

何か単純だな。気絶した2人を見てそう考えていると、ふと奈津美の驚いた声が聞こえ、振り向くといきなり何やら柔らかい感触に包まれた。

それが何か、一瞬分からなかったが、すぐに声の主によって嫌でも分かってしまった。

「うふふ、もふもふー」

「ちよっ！？エリスさん、恥ずかしいからやめて」

今、俺はエリスさんに抱きしめられているのだ。

正確には、抱きしめられたといっても俺たちは成長しているので、昔のようにエリスさんの両腕で包まれることはない。

「達也、あんた味噌汁の匂いがする！ちよっと、近寄らないで」

しかも、奈津美と一緒に……。

服の事で奈津美に罵倒されるが、俺だって好きで味噌汁で汚れた服でいるわけではない。

「うわっ、服に味噌汁が!？」

「それ、ジャージだからいいだろ？」

俺がしれつと言いつつ、奈津美は心底嫌そうに顔を歪める。
第一、奈津美が着ているのは、親父のお下がりだ。そこまで、感情を表に出さなくてもいいと思う。

「よくないっ！折角、お父さんから貰ったものなのに、変な臭いがついたらどうするのよ」

「・・・相変わらずファザコンなんだな」

だが、奈津美は先程俺がしたのと同じ様に真顔でしれつと言いつつ放った。

「半分正解で半分間違いね。私は、ファザコンでブラコンよ。うーん、要するに家族思いつてことね」

「お袋はいいのか？」

「マザコンは、達也の担当でしょ？」

「・・・いつから担当制になったんだか。」

「シスコンでマザコン・・・救いようがないよね。ほら、現にこうして姉と母にくっ付いてるわけだし」

「好きでこうしてるわけじゃない!」

「・・・うわ、唾飛んだ。それに耳元で喋らないでよ、煩い」

シスコンと学校で言われるのは、半分以上奈津美のせいだし、それにマザコンではないと断言できる。

マザコンっていうのは、家でママとか言っていて、日常会話にも母親のことが出てくるはずだ。

俺は、そんなことはないから違う。・・・いや、否定しないと、前のシスコンの時と同じことになりかねない。

「ぎゅってしたいな、ぎゅうって」

「・・・気が済んだら放してよ？」

はつきりとやめてくれと言えないとは、自分のことながら情けなさすぎる。

この辺りは、親父からの遺伝なんだと強く実感できる。親父もお袋には、ほとんど意見できないからな。

・・・こうやって遺伝のせいになっている自分にもまた軽い嫌悪感を持ってしまう。

「えへへー、ぎゅうってしていいのー？」

「・・・達也。一応冗談のつもりだったんだけど・・・。お姉ちゃんとして忠告しておいてあげるけど、マザコンはシスコンよりまずいと思うよ」

「うっ・・・」

最も痛いところを突いてこれたら、言葉なんて出るわけがない。しかし、よく考えるとその発言にはおかしい部分があることに気がつく。

「って、ちょっと待った。どっちもまずいでしょ」

「ふふっ、なーんだ、気づいたんだ。・・・面白くないなー」

いけしゃあしゃあと言いやがって。俺はそう心の中で毒づく。

昔であれば、バカ、アホの一言くらい俺の奈津美に対する言葉の後についたものだ。

「何？文句があるならはつきりと言ったらどう？」

・・・それに引き替え奈津美ときたら、俺が何も言わないのをいいことに言いたい放題。全く成長がない。

家族以外、奈津美の本性を知らないのもまた不思議なものだ。

この傲慢さが滲み出るのが分からないなんて、やっぱり人は見た目なのだろうか？見た目は身内から見ても、悔しいけどそこそこな方だからな。

でも、中身は・・・悪魔のようだと俺は思っている。誰も信じちゃくれないけど・・・。

「じゃあ、ぎゅうつてするね。まずは、たっちゃんから。なっちゃんはお姉さんだから我慢できるよね？」

「もちろん。お姉ちゃんである私が我慢するのは当然よね。エリスお母さん、思う存分達也のこと抱きしめていいよ」

「ちよつと待つ・・・」

俺の制止なんて今のエリスさんが聞いてくれるわけもない。

「ぎゅーっ」

「っ！？」

そもそも俺の制止なんて聞いてくれる人がこの家族にいたのだろうか？

・・・親父くらいか。胸部で圧迫され、息苦しさを感ずる中、そう思った。

誰か助けが来ないかな・・・他力本願な考えを脳裏に描いた時だっ

た。玄関が開く音が聞こえ、俺たちに向けて聞きなれた声が飛んできた。

「ただいま・・・って・・・。何やっているんだ？」

玄関先では親父がまたかと言わんばかりの目で俺たちを見ていた。啞然としている親父と視線が合つて俺は恥ずかしさの余り口をパクパクとさせることしかできなかった。

「・・・そんなことがあったのか」

「・・・まあね」

俺たちが今までにあつたことを話すと親父は苦笑いを浮かべていた。帰ってきたときに見た光景は、エリスさんの胸に顔を埋めていた俺、隣でにやにやと意地悪く笑う奈津美、そして俺を抱きしめていたエリスさん。

さらに、気絶して動かないリユーさんとクティー。

それを見て親父はどう感じたのだろうか。

「よかつたじゃないか、美味しい思いができて」

「ちつともよくない!!」

・・・他人事だと思つてゐるな。確かに柔らかさはあつたけど。

そんなことを考えていると、奈津美からとても可哀想なものを見るような目で見られていることに気がついた。

そして、奈津美は俺が視線を向けたことに知ると、口を動かして何かを伝えようとしてきた。

えーと・・・、この、マ、ザ、コ、ン、（はぁーと）。

親父がいるためか、回りくどい伝え方をする奈津美に少々苛立ちを覚えたが、すぐにその怒りの炎は消えてしまった。

「・・・にゅー」

いつもはしっかりしているエリスさんが、こんな甘ったるい声で鳴いていれば、力も抜けるといふものだ。

それに今日は、いつも以上に壊れているような気がする。奈津美もそう思ったのだろう、心配そうに親父に尋ねる。

「ねえ、お父さん。エリスさんは・・・大丈夫なんだよね？」

「ああ、心配しなくても大丈夫だ。エリスはもともとこうだから」

保冷剤をエリスさんの頭にポンと置いて親父は言った。

エリスさんは、親父が帰ってきてからは、奈津美を抱きしめると言ったことなど、忘れたかのように親父にべったりだ。

親父もエリスさんの頭を撫でており、あまり構ってもらえない奈津美が少しむっと表情をしていた。

・・・ざまあみろ。俺は目を合わせることなく内心そつと呟いた。直接言ったりしたら、機嫌の悪い奈津美に何されるか分からない。情けない気もするけど、この家では女性の方が強いことから、それは仕方のないことだ。

・・・でも、奈津美の半分泣きそうな顔。ぶっ・・・思い出しただけで笑える。

「・・・っ!？」

ひゅっとな風を切るような鋭い何かを感じ俺は思わず顔を上げた。

「へえー、達也はそんな風に私の事思っていたんだ・・・」

そこには、奈津美のいつにも増して冷たい目があった。どうやら声に出してしまっていたらしい。・・・声に出さなくても、うちの女性陣は男性陣の考えが分かるらしい。俺も例外なく遺伝してしまっただよう。

奈津美は俺の両肩をがっしりと掴み、肩を震わせて薄気味悪い笑い声を漏らしている。

これはまずい・・・。そう思った時、不意に親父が俺たちに声をかけてきた。

「しかし、2人はずっと仲が良いみたいで安心したよ」

この姉が弟の肩をがっしりと掴んで半笑いの状況をどう勘違いすればそんなことが言えるのだろう。

「そうでしょ、私たち学校でもとても仲のいい姉弟って言われてるくらいなんだから」

奈津美はいつの間にか幼い頃から他人によく言われていたという太陽のような笑顔を浮かべて俺の肩のゴミを取るふりをしていた。

そりゃ気づくわけないよな。俺が内心溜息をついていることなど知る由もない親父はさらに話を続ける。

「・・・ドジっ子メイドなんて作ろうとしたのが、そもその間違いだった。達也には、色々と迷惑をかけたように悪かった。だが、安心していい。もう、こんなことは2度と起きない」

あまりにも自信のある態度に俺はある最も最悪な状況を予想し、思わず聞き返した。

「もしかして、廃棄するつもりなのか？」

しかし、俺の言葉が浅はかであると親父の言葉ですぐに気づかされる。

「・・・何年、俺がロボットと暮らしていると思っているんだ？お前たちが生まれる前から、ずっと一緒だったんだから、廃棄なんていう考えは毛頭ない。ただ、まあ・・・」

勿体ぶった親父の言葉の続きが気になり話の続きを促すと、親父はクティーも見やって言った。

「・・・1ヶ月くらいは、集中的に再教育の必要はあるな。うちである程度できると思ったんだが、思った以上に難しいみたいだし、ドジの程度が予想以上だ。少しプログラムを修正しないといけないかもしれない」

クティーの製作を担当していた親父としても苦渋の判断であることは俺にだってよく分かる。

幼い頃からずっとロボットの話を聞いていて、親父のロボットへの

愛情は知っている。

俺なんかよりもずっとロボットの事を考えていることも、当然クティーの事も気にかけていることだって知っている。

だから、俺は何も言うことができなかった。親父は、重々しい雰囲気のまま話を続ける。

「今日のことでも、本当は処分しようとは考えた。俺にとって1番大切なのは、奈津美と達也だ。ロボットには人を殺さないように制御装置があるんだが、もしかするとそれさえ壊れているのかもしれない。危険性があると分かった以上は、子供たちの側には置けない。もつとも、俺が家に帰るようにしておけば、こんなことにならず済んだ」

「・・・」

いつの間に目覚めたのだろうか、クティーは親父の話を黙って聞いていた。

クティーは、廃棄されるのではないかという不安を抱いているのかもしれない。

そう思っただけクティーの隣へ移動して座ると、右手をぎゅっと痛いくらいに力強く握られた。

そんなクティーの心配を見透かしたように親父は、先程と打って変わって明るく笑いながら話を始めた。

「達也、それにクティー、そんなに心配するな。俺を信じる。1ヶ月は会えなくなるが、その後はまた元通りだ。・・・思い出を作りたい相手がいる限り、失くした思い出はまた作ればいいし、それ以上にたくさんの思い出を作ることができる。でもな、もう2度と会えないってことが1番辛いことなんだ。いなくなった人との間には、新しい思い出は作れない。それに、過去しか見てないと、大事な時

に現実が見れなくなるしな・・・って説教染みた、おっさんの昔話はこれまでだ。要するに1ヶ月経てば、クティーも今とは見違えるってことだ」

「・・・？分かった、親父。俺も親父の事を信じるよ。俺じゃ、クティーの事をどうしてやることもできなかった。クティーの事、任せるよ」

俺の言葉に親父は黙って頷いた。気になる話もあったけど、それはまた今度じっくりと聴かせてもらおうと思った。

親父は俺との話を終えると、クティーに近づき肩に手を置いた。

「クティー、なるべくなら家を出るのは早いに越したことはない」

「はい。私、頑張ります」

「そんなに緊張しなくても大丈夫だ。クティーに足りないのは人間社会における一般常識。その程度が単に異常なだけで、エリスやリユーだって通って来た道だ。やる気さえあればすぐに出来る」

親父の言葉に話に挙がっていた2人は、少し頬を赤らめていた。何やら恥ずかしい過去が2人なりにあるようだ。

しかし、すぐに表情を切り替えて、クティーの前に行くと言俺によくしてくれたのと同じように頭の上にポンと手を置いて話しかける。

「もちろんクティーにもできます。私たちメイドロボットが必ず通らなくてはいけない道です。私やミリュカさんも同じような失敗を数多くしました。それでも、必ず支えてくださる方がいます。1ヶ月は長いようで短いです。そこで、クティーさんらしさを見つけてくださいね」

「私・・・らしさですか？今はよく分かりませんが・・・1ヶ月後の私にはきっとそれがあると思います」

クティーは、不安そうな表情をもう見せなかった。

きつと1ヶ月後、彼女は大きく成長するのだろう。不安そうな顔の代わりの気の抜けた笑い声であげ、すっかり楽天的な笑顔を浮かべる様子を見てそう思わずにはいらなかった。

はあー・・・大丈夫だよ。少しばかり心配でもあるけど。

俺が内心複雑な気分になっているうちにも、親父は淡々と話を進めていく。

「奈津美、エリス。しばらくはクティーに付きつきりになるはずだから家に帰ることは少ないかもしれない。・・・達也のことは、任せてもいいか」

「お父さん、大丈夫。私は、お姉ちゃんだから任せてよ。お父さん、お母さんがいなくてもちゃんとやってるから」

「はい、お任せください。私が景様の留守の間、お2人の事をお世話いたします」

・・・俺は親父から見ても、まだ心配の種なのか。

「折角帰って来たのに、あまり話さなくてすまない。奈津美はお母さんに似て美人になったな。昔は可愛さとわがままばかりが目立って少し心配していたんだが、随分と大人になったと思う。性格も俺に似ないで世話好きでしっかりしているし、何よりも親父嫌いじゃないところが自慢だ」

そんな俺に対して奈津美にはきつちりとフォローを入れていく。

しかし、俺は特に気にしていない。さっきまで俺がずっと話をしていたわけだし、俺だけが話をしようものなら後で奈津美に何を言われるか。

何だかんだ言っても親父は奈津美には甘いことから、話をしないとすることはありえないわけだけど・・・。

「じゃあ、クティー。これから1か月頑張ろう。それじゃ、いつてくる」

「はい。よろしく願います、景おじさん。いつてくるね」

その日、クティーは親父と家から出て行った。

「奈津美、達也君。私、絶対に立派なメイドになってくるからね」

俺たちはただ彼女のその言葉を信じて待つしかない。俺たち、いや俺にできることはそれくらいしかない。

彼女が戻ってきた時に、何をしてあげられるか。それを考えるのが、今の俺にできることだった。

それから、1か月の月日が流れた。

クティーが帰ってくる日。俺は、朝から落ち着いた気分ではいられず玄関前をうろろと何度も行ったり来たりを繰り返していた。

「ちょっと、達也？クティーが帰ってくるからって、そわそわし過ぎじゃない？」

「分かってるけど、気になるんだから仕方ないだろ」

奈津美に注意されるのも今日で何度目になるだろう。

しかし、俺を注意する奈津美の言葉は優しい。

「まあ、私もそうだからいいけど。どれだけあのドジが直ったのか気になるし」

やっぱり奈津美も気にしていたんだ。

奈津美がぶつきら棒に言う時ほど、実は相手の事を気にしているということを俺は知っている。例外もあるけど・・・。

俺が、意地悪く笑うと奈津美はぷいとそっぽを向いた。いつもであれば、すぐにきつい視線を向けてくるはずが今日に限ってはそのまま戻ってこない。

「帰ってきた」

奈津美の声にはっとして声のしたほうを向くと、そこには1か月前と変わらぬ恰好のクティーが立っていた。

「ただいまあつ！？」

「うわっ！？」

いきなり駆け寄ってきたクティーが扱けて俺はその下敷きになっていた。

彼女は口ボットだから、見た目は奈津美と変わらないスタイルでも当然重い。

俺は自分よりも体重の重いクティーの下で、苦しさのあまり情けない呻き声をあげていた。

「はあ・・・何にも変わってないじゃない。期待して損した」

奈津美の呆れた声が頭上から降ってくる。

「・・・クティー、立てる？はい」

「あ、ありがとう」

奈津美の手を掴みクティーは立ち上がる。

しかし、俺には手を差し出すことなくさっきの仕返しと言わんばかりに俺の前に立つと胸の前で腕を組んで俺を見下していた。

「で、達也はいつまでそうしているの？何、私の下着でも見てるの？」

「げほっ、げほっ・・・そんなわけあるか！！」

俺は、自分でも驚くくらいの速さで立ち上がると奈津美に詰め寄った。

そんな様子を見ていたクティーは、けらけらと声をあげて笑っていた。

「ふふっ、本当に2人は仲がいいね」

・・・まだまだ人を見る目はない。どこが仲のいい2人なんだか。

でも、今はそんなことはどうでもいい。

「そんなことよりも、いつまでもここで話してないで中に上がった

ら？みんな、お前の事を待ってる」
「うん」

玄関にクティーが入ったのを見計らい、奈津美と1度視線を合わせると同時に振り返り俺たちは言った。

「おかえり、クティー」

クティーは突然の事に目をぱちくりとさせて驚いていたが、何も変わる事ない笑顔を浮かべて言った。

「・・・ただいまっ」

これからは、きっとたくさんの思い出を作ることができる。

だって、その人が側にいるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3076e/>

オー！駄メイド

2011年1月9日05時20分発行